

モールトンの文学論とその階層構造

——帰納的批評・文学形態論・世界文学——

Richard Moulton's Literary Theory and its Hierarchical Structure:

Inductive Criticism, Literary Morphology, World Literature

天野早紀

Saki AMANO

一．はじめに

本稿では、大正期国文学をはじめとして近代日本の学術界に対して大きな影響力を持った、イギリス文芸批評家モールトン (Richard Green Moulton) の文学論を扱う。

日本の学術界、ここでは一例として文学史研究を学の主流として出発した近代国文学は、明治期までに行われた文学史記述が事項列挙的なものであったことに対し、大正期国文学は文学を有機体と見てその起源・発生・展開の一代記として文学史の物語を描写するようになった。その中で、日本の学術界で広く認知されたモールトンの文学論は、国文学が oral literature 及び written literature の概

念を導入し、ひいては文学史記述における〈口誦から記載へ〉の二元論的且つ進化的な図式を確立する契機となった。¹⁾

さらにいえば、モールトンの文学論は国文学のみならず、西洋文学、比較文学、民間伝承研究、国語教育、また哲学と、実に多くの分野・領域に影響を及ぼし、まさに一世を風靡したといっても過言ではない状況であった。モールトンの文学論を研究することは、近代国文学以来の文学の歴史的把握の枠組を問い直すことであり、また近代人文科学の諸領域を横断する新たな研究視座を導入する展望を得るものでもある点、一定の研究の価値を持つものである。

しかしそれにも拘らず、モールトンの文学論受容の当時には、彼の文学論の体系のうち一部分をのみ取り出すものも多く、時にはそ

の恣意的な取り扱いの結果、日本への応用時に論理の矛盾を生じることもあった。また現代ではモールトンについて特筆する先行研究自体少なく、その少ない中でも書評等の概略的なもの、⁽²⁾或はやはりモールトンの文学論の体系のうち一領域（各研究者の専門に直接関わる領域のみ）について個別に言及するものが殆どであり、モールトンの文学論を一つの体系として総体的に論じたものはほとんどなかった。⁽⁴⁾理論の上からも研究史の上からも、モールトンの文学論の意義、また日本の学術界との交渉の経緯を適切に評価できる状況には未だないといわざるを得ない。

本稿では、まずモールトンの文学論について、以上に示唆してきたとおり彼の文学論自体の持っていた複層性に着目し、複数領域の有機的に連関する論理構造を解きほぐし適切に理解することからはじめたい。よって概論的にはなるものの、モールトンの文学論はまさにその複層性によってこそ多領域へと接続し一大潮流となり得たと考えられるのであり、したがって近代人文科学の学史を総体的に捉える共通の出発点として、何より重視すべき概論的研究であると考えるのである。

二・モールトンの文学論の体系

モールトン（1849-1924）は、シカゴ大学教授やケンブリッジ大学公開講座講師を歴任するなど、文学研究者であると同時に

に文学教育やその普及に努めた人物である。大学の専門化した（狭められた）文学研究に対し、そのしくみの改善及び元来それに囚われない広く柔軟な視野を持つ市民の文学探求を重視、すなわちアカデミズムとジャーナリズムとを跨ぐ学風に特色がある。このことは著書 *World Literature* の一章分を用いて教育への展望を示した言、⁽⁵⁾またこれを承けて四年後彼の文学論を体系立てた *The Modern Study of Literature* の序文⁽⁶⁾にも、モールトン自身が主張するところである。⁽⁷⁾

そのモールトンの学問の体系とは、彼の長年の著作活動の中で漸次構造立てられていったものである。文学論を体系立てた一九一五年の著書 *The Modern Study of Literature* には、その構造をなす諸部分としてモールトン自ら次の【表一】の著作群を掲げている。なお、以下本文引用に際して邦訳は本多顕彰（一九三二）を用いることとする。⁽⁸⁾

各著作の題目にもうかがわれるとおり、*Literary Evolution*（文学進化）、*Principles of Scientific Criticism*（科学的批評理論）、*Forms of Literature*（文学の形態）、また *World Literature*（世界文学）というように、モールトンの文学論の体系には複数の研究主題が共存していたことが明らかである。

モールトン自身、同じ一九一五年の著作序文に「これまでの私の著作は予備的研究であり、特殊の文学の分野に適用される特別の原理についての論究であつた（本多訳序二頁・原文 pp. vii—viii）」と前

置きして各々の内容を振り返って概略する中で、それら予備的研究の最後に当たる一九一一年の *World Literature* について「私の最後の仕事は、文学の世界全体を、個々の特殊の文学の集合としてではなく、英国人的立場から展望された「世界文学」の概念によつて

年	書名
1885	Shakespeare as a dramatic artist: A popular illustration of the principles of scientific criticism
1890	The ancient classical drama: A study in literary evolution
1895	The literary study of the Bible: An account of the leading forms of literature represented in the sacred writings
1895-	The modern reader's Bible
1901	A short introduction to the literature of the Bible
1903	Shakespeare as a dramatic thinker: A popular illustration of fiction as the experimental side of philosophy
1911	World literature and its place in general culture →三浦閔造 (1912)『世界文学としての聖書』※抄訳 →本多顕彰 (1934)『世界文学』※全訳
1915	The modern study of literature: An introduction to literary theory and interpretation →蘆田正喜 (1923)『文学形態論』※抄訳 →本多顕彰 (1932)『文学の近代的研究』※全訳

【表一】 モールトンの文学論を構成する著作一覧

把握しようとする企てであつた（同三頁・原文 p. vii）」とする。

また *The Modern Study of Literature* については同序文に「私は、次に来る著作（引用注、一九一一年の次、つまり一九一五年の *The Modern Study of Literature* そのもの）の計画並びに効用を明かにする為に、かくの如く詳細にわたつて述べたのである[:]」即ち、文学理論に捧げられた単一なる著作である。個々の作品の論究は本質的なものに還元され、文学の特殊の部分を詳細にわたつて探求した他の著作によつて補足されるのである（同三頁・原文 p. ix）」とする。

一九一一年までの個々の先行著作とその成果の積み重ねを総合的に見、而して一九一五年、本質的理論を帰納した体系化しようとするものとして、部分全体関係の中に位置付けていることは明白である⁹⁾。

さらに、そうして先行著作を帰納したものとしての一九一五年の *The Modern Study of Literature* における目次構成、各章各節の概要、及びそれらの連結の言を見ることによって、モールトンの文学論における階層構造の仕組みを予め概観することもできる。

標題のとおり本書は文学そのものというより文学研究を議論するものであり、モールトンはその主軸に「Inductive Criticism 帰納的批評」（近代批評理論のうち解釈批評の一つといえる）を据える。原書目次では Book IV 以降に該当する。では Book I, II, III は何かといえば、その帰納的批評を可能にするための前提として「Liter-

ary Morphology 文学形態論」、またさらにその文学形態論の前提として「World Literature 世界文学」の考え方を導入する、という運びとなっている。

結論からいえばモールトンの文学論は右の大きく三つの論から成り立っており、さらにいえばそれらが階層構造として重なり合うことで一つの全体＝体系を為している。即ち、第一階層として帰納的批評を考えるためには第二階層の文学形態論が前提となり、またその第二階層を考えるためにはさらに第三階層の世界文学が前提となるもの、いわば地と図の関係といえるものであったのである。

三・モールトンの文学論における階層構造の概観

第一階層：帰納的批評

さて、以下第一階層の帰納的批評から順に確認していきたい。文学研究への議論として批評理論を扱う Book IV では、古典主義に対する近代的批評理論、中でも例えば印象批評や価値の判断批評といった主観的或は演繹的なものに対して、それらの基礎として先行すべき最重要理論としての帰納的批評を据える。

ここでいう演繹とは或る一つの原則に一致する都合のいい一部分をのみ切り取って価値判断（それ以外の部分は「例外」「無価値」として処理）する危険をも孕むものであり、帰納とはそのように部分的な観察に満足することなく、テキスト全体が調和し得る価値の

枠組を模索するものである。この帰納的批評について、モールトンは次のように説明している。

We have in the first place, Inductive criticism: the examination of a particular piece of literature as it stands, with a view to interpretation and evolutionary classification. This is the indispensable basis for all other kinds of criticism.

我々は先づ第一に帰納的批評を持つ。これは、解釈と展開の分類の目的で、あるがままの或る特殊の文学を吟味することである。これは他のすべての種類の批評に欠くべからざる基礎である。（原文 p. 227・本多訳二五九頁）

ここで重要なことは、文学があるがままに吟味する帰納的批評というものが、「解釈と展開の分類」を視野に入れて行うものとされていることである。というのは、後述のとおり「解釈」「展開の分類」とはいずれも第二階層の文学形態論が負うところの任務であったからであり、先行していえばそれらは批評の準備段階として行う解釈、その解釈のための基準となる文学形態論、その文学形態論を固定的で機械的なものとしなないための展開の分類の発想、というように、やはり前提条件として連なる連関関係にあった。したがって次には、帰納的批評に伴う視野である「解釈」「展開の分類」と第

二階層の文学形態論との関係を、それぞれ確認していく必要がある。

第二階層：文学形態論

文学形態論とは、文学をジャンルによって演繹的に分類し解釈・批評をするものではなく、「form 形態」いわばゲシュタルトによって、その構造＝要素の相互関係から帰納的に吟味していく過程、その要素関係の組織である。羅針盤に喩えられるところの文学活動の四つの根本的方向 (Poetry 詩、Prose 散文、Description 叙述、Presentation 表出) とそれらの組み合わせによって生じる要素として、Epic 叙事詩、Lyric 抒情詩、

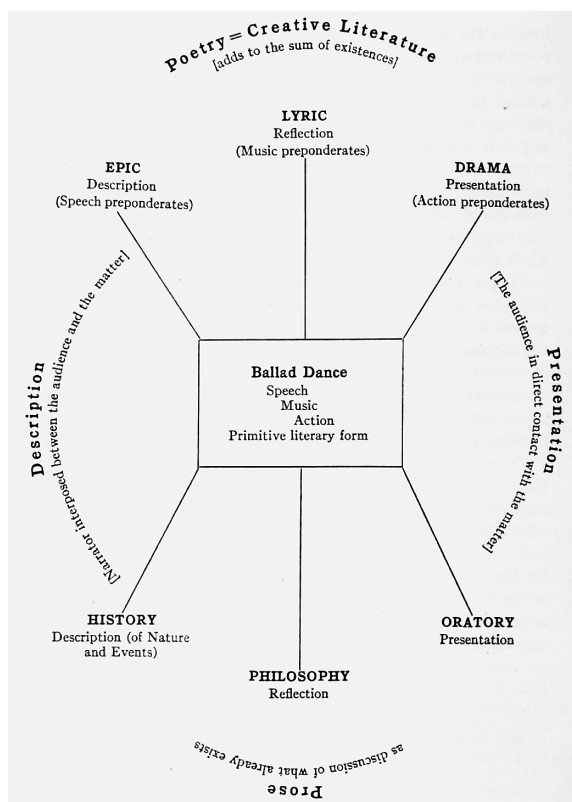
Drama 戯曲、History 歴史、Philosophy 哲学、Oratory 雄弁、の六つが挙げられる。文学形態論を扱う Book I の Chapter I-1 では、次の【図一】のとおりに図解される。

モールトンは、この六要素について「個々の文学作品が帰せられるべき文学の六つの種類として理解されるべきではない。これらは化学の諸元素に似てゐる。実際の文学にあつては、これらは、時には単独で見出され、より屢々組合はされて見出されるのである (本多訳二一頁・原文 p. 20)」と、ジャンルと形態要素との区別の必要を絮説する。

ではこうした文学形態論がモールトンの学の階層

構造の中で位置するところを確認したい。文学を文学形態の六要素の相互関係によって帰納的に吟味していくべきことを踏まえた上で、Book I ではその最終章として Chapter III: Literary Form the Key to Interpretation、つまりまさに「解釈の鍵」としての文学形態の役割が説かれている。

It thus becomes desirable to lay down as a fundamental principle in the study of literature that form is the key to in-



【図一】モールトンの文学形態論の根本的四方角と六要素 (Moulton (1915). Chart I. In *The Modern Study of Literature* (p.18).)

terpretation.

A clear grasp of the external form is essential for entering into the matter and spirit of all literature.

かくして、文学研究の根本原則として、形態は解釈の鍵である
と規定することが望ましいことになってくる。

外的形態の明瞭な把握はすべての文学の内容精神に這入るの
に欠くべからざることである。(原文 p. 64・本多訳七四頁)

ここでは、「外的形態」の把握から「内容精神」へ這入っていく
という、モールトンの文学研究の過程とその筋道が示されている。

すなわち、ジャンルという所与の演繹的枠組によるのではなく、要
素の相互関係によって帰納的に「形態」を導き、それを鍵としてい
よいよ「内容精神」の解釈を行うというものである。反面教師とす
べき例としては「もしも彼が風刺詩を読んでゐて、それを真面目な
議論と考へ違ひをしたとするならば、彼はひどい間違ひをしてゐる
のである(本多訳七四頁・原文 p. 64)」と、一見してのジャンルに
基く判断の早計によつては内容精神への誤謬に陥ることを説明しな
がら、翻つて「解釈の鍵」としての文学形態の役割とその重要性を
説いたのである。

第一階層である帰納的批評が視野に入れる「解釈」と、それに関
わつて第二階層の文学形態論の負うところの任務とは、すなわち帰

納的批評の準備として行ふべきテキストの内側からの意味整序(内
容精神の解釈)とそのための指標(要素と外的形態)であつたとい
える。

第三階層…世界文学と文学の展開的分類

それでは、第一階層の帰納的批評の視野のもう一面であり、第二
階層の文学形態論が負うところのもう一つの任務であつた「展開的
分類」とは、一体何であつたか。ここでは、階層構造の中間に位置
する文学形態論が、一方では第一階層の鍵となり、他方では「展開
的分類」を経由することで第三階層「世界文学」への連繫をも担つ
ていたことが明らかになる。

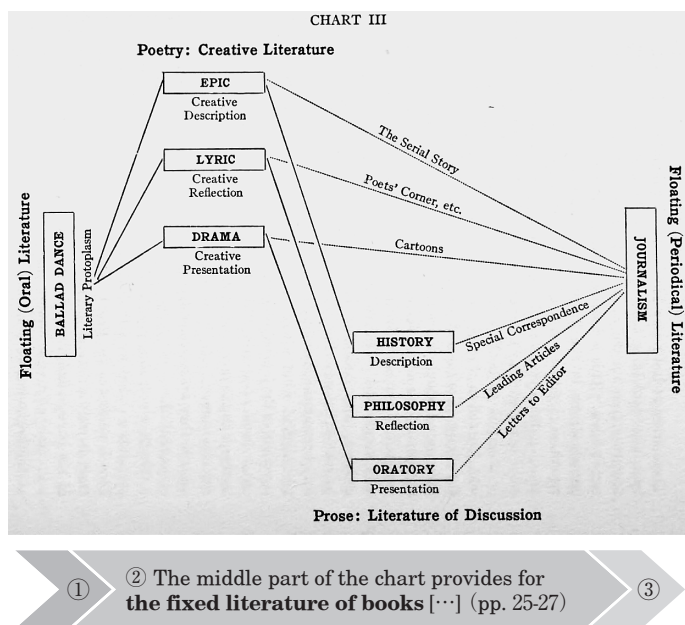
構造理解の便宜上、以上に確認してきた第一・第二階層から第三
階層への連絡の筋道を予め示しておこう。ここでは新たに文学進化
の一般法則 *Literary Evolution* を導入し、それを第二階層の文学
形態論に適用することで、文学活動の四つの根本的方向に基づく分類
指標であつたそれを、新たに時間的關係に基づく「展開的分類」の
指標とする。また、それをさらに第三階層即ち世界の文学系統關係
を意味する「世界文学」の歴史に反映するもの *Literary Evolution*
as reflected in the history of World Literature——モールトン
(一九一五)の *Book III* の題目そのものである——と見做すのであ
る。

まず、文学進化の一般法則 *Literary Evolution* とは、モールト

ンの議論においては先に確認した第二階層の文学形態論の解説 (Book I の Chapter I-I) の直後、Chapter I-II にて解説されるところのもので、そこに理論上の連絡関係のあることは、「形態のこれらの要素を更に進んで考察することは、我々を、文学理論における今一つの基礎観念に連れてくる (本多訳二二頁・原文 p. 20)」という言にも明らかである。

「文学」という基礎観念とは、「literature is developing spontaneously」文学が自然的に発展する」場合に辿る「The stages of literary advance 文学の前進の諸段階」のことである (いずれも原文 p. 20・本多訳二二―二二頁)。すなわち、① 第一段階「Ballad Dance 民謡舞踊」を文学の原形質として、内容と言語の表現媒体との上からこれを「Floating (Oral) Literature 浮動的 (口伝的) 文学」の段階とする。それが② 第二段階として「Fixed (Book) Literature 固定 (書物の) 文学」の段階へと移行する。この第一段階と第二段階の間については「我々は二者の間に分類の線を引き出すことは出来ない、浮動及び固定文学は相並んで進むからである (原文 pp. 25―27・本多訳二七頁)」。そして最後に③ 第三段階として「Floating (Periodical) Literature 浮動の (定期刊行の) 文学」の段階、すなわちジャーナリズムの段階に到達する。

ここで決して見逃してはならないのは、右のような「前進の諸段階」について、モールトンがこれを第二階層の文学形態論に適用していることである。「我々は、ここで、浮動及び固定文学の区別を、



【図二】文学形態の六つの要素と浮動文学・固定文学 (Moulton (1915). Chart III. In *The Modern Study of Literature* (p.26).)

(※矢印の図解は稿者による)

我々が文学形態の六つの要素として見たところのものに適用しなければならぬ (本多訳二七頁・原文 p. 25)」。それは次に掲げる【図二】のとおり図解される。なお、文学形態論との対応関係の明瞭を期し、各段階の進行については先に示した番号とともに私に矢印の図解として並置した。

文学作品の内容の上から流動的か固定的か、またそれに伴う言語

の表現媒体の上から音声か文字かという観点から文学進化の各段階と相互の関係が説かれ、またその各々に対応する体系的な学術用語が用意され、さらに文学形態論との対応関係を示す体系的な図解が用意された。しかし注意すべきことは、ここにおいて文学形態の六つの要素が、文学活動の四つの根本的方向を持つ羅針盤上ではなく、過去から現在への進化の歴史上へと転移されたことである。つまり、分類要素はそのままに、分類指標の質が共時的なものから歴史的なものへと変化させられたことになる。それは次のとおり本図解へのモールトン自身の解説からも明白である。

This transition from the floating literature of the ballad to the very different floating literature of journalism, with the intervening forms of fixed literature, seems to give us a progressive movement that has attained its completeness. What Chart III on page 26 reflects, so to speak, a life history of literary form.

民謡舞踊の浮動的文学からジャーナリズムの非常に異つた浮動的文学への推移及びその中間に來る固定的文学の諸形態は、その完了した前進運動を我々に示すやうに見える。第三図表が与へるところのものは、云はば文学形態の一代記である。

(原文 p. 28・本多訳二九—三〇頁)

「完了した前進運動」「文学形態の一代記」とあるとおりである。文学形態(の要素)は進化するものであると見做されるに至つた。それはモールトンの生きた一九世紀の文芸批評をはじめとするジャーナリズムの時代へ行き着くべき進化の筋道でもあつた。

以上のとおり、第一階層の帰納的批評の視野のもう一面であり、第二階層の文学形態論が負うところのもう一つの任務であつた「展開的分類」とは、帰納的批評の準備として行うべきテキストの内側からの意味整序(内容精神の解釈)とそのための指標「文学形態論(要素と外的形態)」について、その指標に対して文学進化の一般法則 Literary Evolution を上書き適用した、時間的關係に基づく新たな解釈の鍵としての役であつたといえる。

さて、第二階層の文学形態論が時間的關係に基づく「展開的分類」の指標となつたとき、最後の連関として、それは世界の文学系統關係を意味する「世界文学」の歴史に反映するものと見做される。まずはこのやうな「世界文学」の概念を確認しておきたい。これについてモールトンは「World Literature 世界文学」と「Universal Literature 全世界の文学」とを區別して、次のとおり説明する。

We must distinguish between universal literature, a mere name for the totality of all existing literatures, and what may be called world literature. This is universal literature

seen in perspective from a given point of view—presumably, the point of view of reader's national civilization.

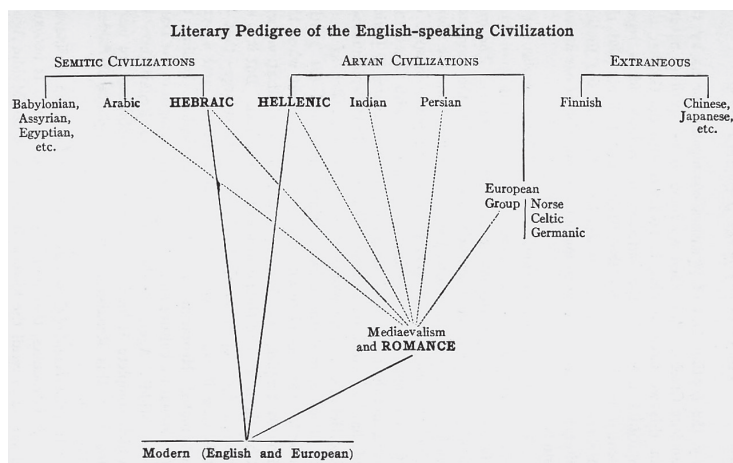
我々は、現存のすべての文学の総計に与へられた名称に過ぎないところの全世界の文学と、我々が世界文学と呼んでもよいところのものとの間の区別をしなければならない。後者は与へられた見地から、多分読者の国民的文明の見地から、遠近法の仕方によつて見られた全世界の文学である。

(原文 p. 79・本多訳九一―九二頁)

World Literature とは世界中の文学の総和ではないという。「或人が、地上で話されるすべての言語を習得してしまつても、なほかつ彼は言語学者ではないのである (本多訳九一頁・原文 pp. 78-79)」との比喩は言い得て妙である。それはモールトンが自身の定めるところの「世界文学」についで Unity of Literature とも表現するとおり、雑多な全体ではなく、右にいう「与へられた見地」即ち一つの基準点を置き、そこから有機的に連絡させて眺めた世界の文学の体系を意味するものであった。

そしてその基準点と連絡の筋道とは、右引用部に「読者の国民的文明の見地から、遠近法の仕方によつて見られた」ものであるという。具体的には、モールトンがさらに説明を加えて「我々がその一部分であるところの文明を、世界の他の文明が反映してゐる諸文学、

との関係において理解することである。私は、英語国民の文明の文学系統の表を、既に挙げた拙著からとつて掲げる (原文 p. 80・本多訳九三頁)」というとおり、イギリス文学の見地から見た英語文明の文学系統図、いわば家系図とも呼ぶべきものであった。イギリス文学の見地から見た英語文明の文学系統図とは、次に掲



【図三】英語国民の文明の文学系統図
(Moulton (1915). Chart VI. In *The Modern Study of Literature* (p.81).)

げた【図三】のとおり、またこれをモールトンが題して「Literary Pedigree of the English-speaking Civilization 英語国民の文明の文学系統図」というとおりである。図の下部にある Modern (English and European) がモールトンの属する英語文明の文学の近代の到達点であり、その過去の脈には中世文化とロマンズ、またヨーロッパ群として古欧・ケルト・ゲルマンを経由して、セミティック文明とアリアン文明と連なっていることが分かる。

ここで注意すべきは、第一に、右のような系統関係が、単なる文学の系統関係ではなく「文明の」文学系統であることである。世界文学とは文学系統図であり、それは視点として据えた近代の一国文明の文学への筋道であり、したがってそれは文学に見る世界の文明化の歴史の反映ともいうべきものであった。次の引用には該当部に私に傍線を付した。

World literature presents the literary material as an historic unity. The main stream is the Classical literature, which has had the prerogative voice in determining our literary conceptions. [...] The literary stream continues to receive tributaries as it passes through ages of mediaevalism, and of the separate modern literatures moving under common conditions side by side. [...] Only world literature — literature studied apart from distinctions between particular lan-

guages — gives a body of literary material from which it is safe to make generalizations: only in world literature can the life history of literature be fully revealed.

世界文学は歴史的統一としての文学的材料を提出する。その本流は古典文学で、これは我々の文学的諸概念を決定する最高の発言権を持つて来た。基督紀元第一世紀からこの本流は聖書の文学といふ姉妹的の流れを受け容れてゐる[...]その文学の流れは、中世文化の諸時代及び共通の条件のもとを相並んで進む諸文学の諸時代を通り抜ける間に様々の支流を受け容れつづける[...]唯世界文学——個々の言語間の差異を離れて研究された文学——のみが、安じてそれから帰納がなし得られるところの文学的材料の一群を与へる。世界文学においてのみ文学の一代記が完全に表されることが出来る。

(原文 pp. 91—92・本多訳一〇四—一〇五頁)

右は「世界文学」概念を説く Book II の総括部分であり、したがって英語文明の文学系統の流れが要約された箇所である。注目すべきは、傍線を付したとおり、この系統図が「the historic unity 歴史的統一」を示すものであるということである。端的に言えば、世界文学とは系統図であると同時に現代自国文明に至る道程でもあり、これは文明化の「歴史」の道程とも見做せるものであったので

ある。

さらに、注意すべき第二の点として、そうした現代自国文明に至る文学系統図としての世界文学が、これも傍線部のとおり「the life history of literature 文学の一代記」と表現され総括されている点である。「文学の一代記」とは、先にモールトンの文学論の第二階層に【図二】として見た、文学の進合法則の適用された文学形態論の「展開的分類」を評したキーフレーズでもあった。

すなわち、第三階層の世界文学の系統関係とは、第二階層の文学形態の進化の歴史と重ね合わせられるものであった。それは世界文学概念の解説に続く Book III が、Literary Evolution as Reflected in the History of World Literature の副題を持つとおり、世界文学の歴史には文学形態の進化が反映されるのであり、それはその第三篇の中で実際に次のように語られるとおりである。

The evolution of our world literature, as we have seen, takes form as a continuous movement. Its first stage is the ancient Classical literature of Greece and Rome: in this we are able to trace the earliest steps of literary development from the embryonic literature of the ballad dance. There comes a point when the Hellenic literature mingles with other factors of our world literature, drawn in as tributaries into a river. The Christianization of the Roman Empire brings in

Hebraic literature; in the course of the Middle Ages are added those types of literature we sum up as Romantic. The movement continues in our modern world, and we see the later stages of literary evolution up to the floating literature of the periodical.

我々の世界文学の展開は、我々が今まで見て来た如くに、持続的進行としての形式をとる。その第一の段階は希臘羅馬の古代古典文学であり、この中に、我々は民謡舞踊の発生期の文学からの、文学の発展の最も初期の歩みを跡づけることが出来る。

そこに、古希臘文学が、支流が本流に引き込まれるやうに引き入れられた我々の世界文学の他の諸要因と交る一点がある。羅馬帝国の基督教化はヘブライ文学をもたらししてゐる。中世期の経過の間に、我々がロマンティックとして総括するところの文学の諸の型が加へられる。この進行は我々の現代世界において継続し、我々は、定期刊行物の浮動文学に至るまでの文学の展開の諸段階を見る。(原文 p.119・本多訳 一三二頁)

世界文学としては「希臘羅馬の古代古典文学」から「我々の現代世界」へ、また文学形態論としては「民謡舞踊の発生期の文学」から「定期刊行物の浮動文学」へと至るものとして、第三階層と第二階層とを並置し重ね合わせながら「我々の世界文学の展開」「文学

の展開の諸段階」を論じていることは、実に明白なことであろう。

階層構造の総括

第二節末尾において、モールトンの文学論は大きく三領域から成り立っており、さらにいえばそれらが階層構造として重なり合うことで一つの全体Ⅱ体系を為しているとした。それらすべての階層の実態を確認してきたところで、最後に各領域間の議論の筋道を次の枠内のとおり総括しよう。各領域・各階層の重要概念やキーワード、また学術用語も反映した。また、地と図関係を視覚的にも明示するために、第三階層を底部としてそれが背景として影響を及ぼす第二階層、また第二階層が背景として影響を及ぼす第一階層へという形に並べるものである。

四・展望…モールトンの文学論と近代日本の学術界との交渉の闡明に向けて

モールトンの文学論は、以上のとおり、第一に帰納的批評、第二に文学形態論、また第三に文学進化の法則と世界文学論の三領域に亘るものであり、さらにそれらが有機的に連関する階層構造を有するものでもあった。

そうした複層性によってこそ、モールトンの文学論は国文学をはじめとして日本の学術界の多領域へと接続し、特に大正期以降、学

① Inductive Criticism

帰納的批評

↑ 適用 (解釈のための鍵)

② Literary Morphology (chart I)

Epic, Lyric, Drama, History, Philosophy, Oratory

poetry, prose + description, reflection, presentation

要素とその様式関係: the element of literary form/ four cardinal points of literary form

↑ 適用

③ Literary Evolution (chart II. III)

← 反映

as reflected in the history of World Literature (chart III)

① floating (oral) = Ballad Dance → ② fixed (written)

→ ③ floating (periodical) = journalism

時間関係 (世界文学の歴史): the stages of literary advance, a life history of literary form, stages in literary evolution

界の一大潮流となったものと考えられる。ここでは展望として概観のみ示せば、第一の帰納的批評の面からは、『小説神髓』に見るように作家でありながら文学理論をも著した坪内逍遙¹⁰、また一つの批評理論としてというよりも文学研究の方法論一般として比較検討する視座を持った哲学者の谷川徹三¹¹などの著作において、モールトンの名への直接の言及、また彼の文学論の紹介・検討が行われている。

第二の文学形態論やこれに適用される文学進化の法則の面からは、文学の一般法則を明らかにしようとする視座を持つドイツ文学研究者の茅野蕭々の著述¹²がある。また国文学をはじめとする大正期の文学史研究にも例があり、たとえば「外国文学と対照して考察することによって日本文学を如実に見、その独特の展開の理法を見出さんとした」¹³英文学者の土居光知、精神科学的視座から「作家の創作態度の内面を貫く文学の展開」¹⁴を明らかにしようとした国文学者の垣内松三、また独自の信仰起源文学発生論を打ち立てた民俗学者の折口信夫¹⁵などが、モールトンの文学論を引きつつ自身の文学史論の中で積極的な批判検討を行っている。なお第三の世界文学論はこれまでに見てきたとおり第二の文学形態論と進合法則の問題と分離しがたく、同一人によって同時に言及・検討される場合も多い。英文学研究者であり比較文学的な視野も持つ野上豊一郎¹⁶や前述の土居光知¹⁷などがこれに当たる。

また、「文学論」として体系立てられたものではなかったが、モー

ルトンの各論に都度見出される教育へのまなざしも見逃すことができない。この点は国文学者であり国語教育者でもあった前述の垣内松三¹⁸のほか、土屋康雄¹⁹らの著作が注目される。

日本の学術界の多領域への接続はもちろんのこと、さらなる展望として、なぜモールトンの文学論でなくてはならなかったのか、なぜモールトンの文学論がそれほどまでに日本に影響力を持ち得たのかという点についても併せて検討していくべきであろう。現時点では、日本における早い時期の紹介者が文学界や学界に十分な影響力をもつ人物であったこと、またモールトンの文学論が体系立てられた一九一五年の *The Modern Study of Literature* の出版経緯に、いくつかの重要な手がかりがあると推測する。

第一の手がかりとして、早い時期の紹介者、例えば前述の坪内逍遙は、モールトンの文学論の第一階層の帰納的批評について、一八九一年の「読売新聞」に「近ごろモールトンが唱ふる科学的批評の旨も此意の外ならず演繹的専断的批評の世は逝かんとす帰納的批評の代近づけり」²⁰として言及している。さらにいえば、この言は森鷗外によって批判対象とされ、いわゆる没理想論争へと発展したものであったことが指摘される²¹。なお年次関係や内容から推測するに、逍遙が参照したのは *A popular illustration of the principles of scientific criticism* の副題を持つ、モールトンの一八八五年の著書²²であったと考えられる。

また第三階層の世界文学論については、モールトンの同名著書

World Literature 刊行の翌年早々の一九二二年、キリスト教徒であり翻訳家であった三浦閑造による抄訳として『世界文学としての聖書』が刊行されたことが指摘される⁽²³⁾。三浦の経歴を見てみると、

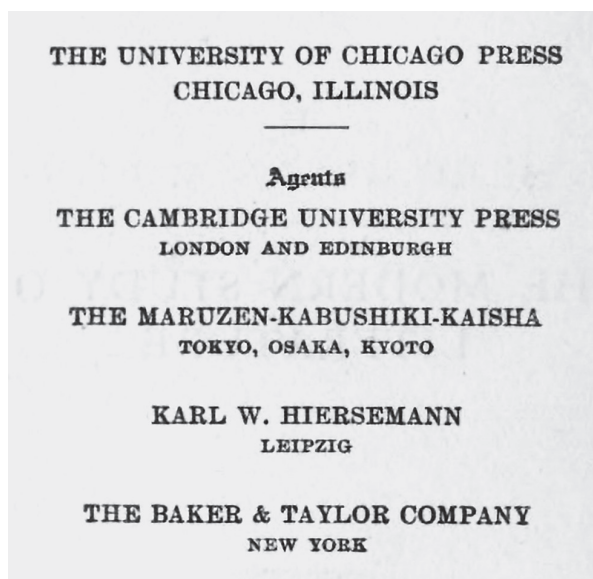
彼は「私は田舎の小学校に勤めながら（引用注、一九〇三年赴任）母を養って勉強した。英文の世界文学、哲学を玩味して、神秘哲人としての著作家になろうと志し」、「有名な外国の本を原書で一生懸命読んで」いたと振り返る⁽²⁴⁾。その後教師を辞し、一九〇九年から一九一三年まで青山学院神学部に学んだ。英文学については兄が英語教師であったこと、また神学については父の死を契機にキリストのビジョンを見たこと、姉がクリスチャンであり新約聖書を貰っていたことが背景にあったという⁽²⁵⁾。

時代背景としては、右のような三浦の当時の経歴は、大正後期の世界文学全集の隆盛の時期に先行している。しかしここでは、「世界文学」としての英語文学に原文で直にアクセスできたこと、そして事実、モールトン原書の翌年には訳書刊行を実現したことの意義を鑑みたい。三浦と『世界文学としての聖書』は、三浦本人の環境や素養が可能とした *World Literature* への直接且つ同時代的な接触によって、日本における「世界文学」の翻訳・受容の時代を先導したものと考えられる。

モールトンの文学論は、このとおり、明治期の文壇における初の大規模な文学論争、またキリスト教や文学に関わる翻訳活動を背景とする大正初期のコンテンポラリーな要請の下に、文学界や学界に

十分な影響力をもつ人物によって、早く周知の機会を得ていたことがうかがえる。

さらに第二の手がかりとして、モールトン（一九一五）の *The Modern Study of Literature* の出版事情がある。これには、同書の初版時点から既に、日本の輸入書販売の老舗である丸善がエージェントとして名を連ねていたということがある。次の【図四】に「THE MARUZEN-KABUSHIKI-KAISHA / TOKYO, OSAKA, KYOTO」と記されるとおりである。



【図四】モールトン(1915)エージェント一覧
(Moulton (1915). Agents. In *The Modern Study of Literature* (p.vii).)

日本の書店がエージェントとなったことは、前掲著作群（表

一）の中では初めてのことである。前述のとおりモールトン（一九一一）の *World Literature* についていち早く抄訳を刊行した三浦には個人の経歴や素養もあったろうが、モールトン（一九一五）は彼の著作群の中では日本で最も一般に手に入りやすかったと考えられる。個々の先行著作を帰納し体系化した概論書であるという意味で内容の上からリーダーであったそれが、物理的にもリーダーな形で大正期の日本に流通したものと推測できる。

モールトンの文学論は、本稿冒頭で述べたとおり近代国文学の文学史記述の図式を確立する契機となったことによって、また以上のとおり文学論そのものの複層性や紹介・出版事情によって、近代人文学の諸領域を横断して強い影響力を持つものとなっていた。

モールトンの文学論を共通の出発点として、近代人文学の学史を総体的に捉えることも今後の課題としたい。

（注）

- （1）拙稿『《口誦》と《口承》の学史的意義の再検討』『文学・語学』第二二三号（二〇二一・一一）。
- （2）重松泰雄「本は生きている——（十九）文学の近代的研究・モウルトン著』『国文学・解釈と鑑賞』第二九卷一一号

（一九六四・一〇）。

（3）モールトンの文学論は、帰納的批評・形態論・世界文学の三領域の階層構造となっている。この中でいずれの領域個別・専門的に言及するものであるかに触れつつ、以下年次順に先行論を挙げる。

- ① 土屋康雄「モールトンの文学形態論」『読みに生きる読み方教育』明治図書、一九三二年。解釈的批評と文学形態論の側面を、教育の視座から。
- ② 大木春基「モウルトンの文学的形態の研究概観」『新制中学研究叢書 第3巻 国語科』教育振興会、一九四九年。概論的な中で特に解釈的批評と文学形態論の側面から。
- ③ 本多顕彰「モウルトンの弟子・私の批評方法」『文学界』第九卷一号（一九五五・二）。帰納的批評の側面から。
- ④ 本多顕彰「モウルトンの読書計画」『西洋文学入門』社会思想研究会出版部、一九六〇年（一九五七年の章文社版の加筆新版）。世界文学の側面から。
- ⑤ 久保田芳太郎「没理想論争をめぐるモウルトンとハルトマン」『比較文学年誌』第八号（一九七二・三）。帰納的批評の側面から。
- ⑥ 阪井芳貴「モールトンの文学論（折口信夫の人物誌・書物誌）」『国文学・解釈と教材の研究』第四二卷一号（一九九七・一）。概論的な中で特に文学形態論と世界文学の

側面から。

- ⑦ 秋草俊一郎『世界文学』はつくられる 1827-2020』東京大学出版会、二〇二〇年、特に第一部第一章（二七―九三頁）。世界文学の側面から、モールトンの議論の細部からその受容までを網羅的に整理した、最新の研究成果。数少ない例として、野地潤家『垣内松三研究…「国語の力」を中心に（野地潤家著作選集 第11巻）』（明治図書・一九九八）は、垣内松三という、モールトンの文学論の三領域全体に亘って目配りをした近代の国文学者を研究対象とするゆえ、野地も結果として総体的な研究成果をあげている。但し分析的というより資料集的な性格を持つ著作である。

- (5) 「本書は、教育の見地から、正式の大学教育、及び、思想家と読書家の生活を満たしてゐる半自発的の自己教育の見地から書かれた」。Moulton, R. G. (1911). *World literature and its place in general culture*. New York: Macmillan. 邦訳は本多顯彰『世界文学…及び一般文化におけるその位置』（岩波書店・一九三四）を用いた。原文では四四一頁、邦訳では四五一頁。
- (6) 「学校の教授機関は方法及び綿密さに好適のやうに思はれるが、これは専門化のアカデミックな偏向によつて相殺される。一般読者は見解の広さを保つてゐる」。Moulton, R. G. (1915). *The modern study of literature: An introduction to literary theory and interpretation*. Chicago: The University of

Chicago Press. 邦訳は本多顯彰『文学の近代的研究…文学の理論及び解釈の序論』（岩波書店・一九三二）を用いた。原文では序の九頁、邦訳では序の四頁。

- (7) こうしたモールトンの「教育」の背景は、笹沼俊暁『国文学』の思想…その繁栄と終焉』（学術出版会・二〇〇六）や、秋草俊一郎『世界文学』はつくられる 1827-2020』（東京大学出版会・二〇二〇）等先行研究でも詳細に検討されている。但し、そうした先行文献における「教養」や「大学拡張」といった論題は、インドにおける植民地教育から逆輸入して制度化された英語英文学教育の「教化」の性格との類似を特に指摘するものである場合が多い。モールトンが、在野の市民こそ持ち得た専門化されない広く柔軟な視野をも評価していたことを鑑み、再考すべき余地もあると考える。

- (8) 本多顯彰『文学の近代的研究…文学の理論及び解釈の序論』岩波書店、一九三二年。

- (9) なお、それら著作群の標題部分等の著者紹介に着目すると、一九〇一年までは英語文学 (*Literature, English Literature, Literature in English*) の教授とされたが、一九〇三年以降には文学理論と解釈 (*Literary Theory and Interpretation*) の教授とされる。ここでのいう「文学理論と解釈」とは、一九一五年の著作に掲げられた副題まさにそのものであり、したがって一つの学問体系を打ち立てる専門家の専門書として、内外とも

に認識されるようになったものと推測できる。

- (10) 逍遙「梓神子（第十回）」『読売新聞』別刷、一八九一年六月一七日。
- (11) 谷川徹三「文芸批評概説」『日本文学講座 第一巻』改造社、一九三三年。
- (12) 茅野蕭々「文学概論」『日本文学講座 第一巻』改造社、一九三三年。
- (13) 土居光知『文学序説』岩波書店、一九二二年。序一頁。
- (14) 垣内松三「文学反響 (Literary Echoing)」『國語と國文学』創刊号（一九二四・六）。五頁。
- (15) 折口信夫「日本文学の唱道の発生」『日本文学講座 第一二巻』新潮社、一九二七年。後年「国文学の発生（第四稿）」として『古代研究第二部 国文学篇第一』（大岡山書店・一九二九）に収録。『折口信夫全集 第一巻』所収。
- (16) 野上豊一郎「比較文学論」『岩波講座世界文学 第一五回配本』岩波書店、一九三九年。
- (17) 土居光知「英文学研究の態度及び対象性」『帝国文学』第二五巻第三号（一九一九・三）。『英文学研究』第一冊（一九一九）に再録。土居光知「国民的文学と世界的文学」『思想』創刊号（一九二一・一〇）。
- (18) 垣内松三『国語の力』不老閣書房、一九二二年。
- (19) 土屋康雄「モールトンの文学形態論」『読みに生きる読み方』
- (20) 注(10) 参照。
- (21) 久保田芳太郎「没理想論争をめぐって…モールトンとハルトマン」『比較文学年誌』第八号（一九七二・三）。
なお、帰納的批評のみならず、逍遙はこれ以前既に「世界文学」と密接な関連をもつ比較文学論について、イギリス文芸批評家の論を翻訳しつつ自らの見解を示した「比照文学」の講義を行っていたことが事典類をはじめしばしば指摘されている。但し「比照文学」が翻訳したのはポスネット (Hutcheson Macaulay Posnett) の一八八六年の著書 *Comparative Literature* であり、また講義本文中にポスネットと併せて参照したもののカーライル (Thomas Carlyle) やアーノルド (Matthew Arnold) らの論であって、それらはモールトンの「世界文学」論が確立する以前のものであった（管見の範囲ではモールトンの著書に *world literature* の語が現れるのは一八九五年以後のことである）。講義本文を見てもモールトンの名は確認できない。講義録の翻刻には、井上英明・富田仁「資料」坪内文学士講義 比照文学 *Comparative Literature* 翻刻にあたって『比較文学年誌』第二号（一九六五・一一）、また斎藤一寛「坪内逍遙講義「比照文学」の解説」明治文化研究会編『明治文化研究 第四集』日本古書通信社、一九六九年。
- (22) Moulton, R. G. (1885). *Shakespeare as a dramatic artist*.

A popular illustration of the principles of scientific criticism.
Oxford: Clarendon Press.

- (23) 三浦関造『世界文学としての聖書』教文館、一九一二年。なお、本書には序文や跋文が添えられず、直接の出版経緯や意図を窺うことはできない。

- (24) 秋草(二〇二〇)。特に第一章の6の四一頁、四五頁。書誌は注(7)参照。

- (25) 三浦関造『人間の秘密』竜王文庫、一九五五年(初版)、一九六二年(第六刷)、二〇〇一―二〇一二頁。引用前者の初出は『实际的総合ヨガ』『至上我の光』第二一号(一九五五・二)であり、当時「英文の」の一句は無かった。引用後者の初出は「☆竜王学園便り」『至上我の光』第五七号(一九五八・一二)であり、当時「有名な外国の」の一句は「外国の有名な」であった。

- (26) 岩間浩編『三浦関造の生涯…総合ヨガ創始者』竜王文庫、二〇一六年、九〇頁。